様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１日現在

機関番号：３２４０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０４０６

研究課題名（和文）所有文に関する意味論的・語用論的研究

研究課題名（英文）A Semantic and Pragmatic Study of Possessive Sentences

研究代表者
西山　佑司（NISHIYAMA YUJI）
明海大学・外国語学部･教授
研究者番号：90051747

研究成果の概要（和文）：所有文は日本語では「A（に）は B がある。」、英語では“A has B.”の形で現れる。本研究では、所有文をコピュラ文や存在文との関係で有機的に記述・説明できる一般理論の構築を試みた。本研究は、コピュラ文や存在文に関する独自の意味理論と、その理論を背後で支えている名詞句に関する意味論的研究（とくに、指示的名詞句と変項名詞句の区別、および飽和名詞と非飽和名詞の区別を強調する名詞句意味論）を理論的武器とする。

研究成果の概要（英文）： Possessive sentences take the form “A (ni) wa B ga aru.” in Japanese and “A has B.” in English. This study proposed to construct a general theory that makes it possible to describe and explain possessive sentences organically in relation to copular sentences and existential sentences. The theoretical tools employed in this study include original semantic theories of noun phrases and copular and existential sentences. Specifically emphasized are the distinction between referential noun phrases and noun phrases involving a variable and the distinction between saturated nouns and unsaturated nouns.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	900,000	270,000	1.170,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：所有文・存在文・コピュラ文・指示的名詞句・変項名詞

１．研究開始当初の背景

(1) 所有文に対するこれまでの言語学的研究では、生成文法理論の立場からの統語論的考察が主であり、所有文自体に対する意味論的・語用論的観点からの考察は十分とはいえなかった。

(2) 所有文(i)と存在文(ii)は、共に「A にはB がある」の形式をもつため、しばしば混同されやすい。

(i)　太郎には妻子がある。(所有文)

(ii) 机の上には本がある。(存在文)

これらの構文に対する古典的分析［Kuno 1973、柴谷 1978］では、所有文は他動詞文であり、A が主語で、B が目的語となる。一方、存在文は自動詞文であり、B が主語で、A が場所を表す付加詞となる。しかし、この分析では、「イル」が所有文に表れないことから、(iii)は、「妻と子」が主語となる自動詞文の存在文となる。

(iii) 太郎には妻と子がいる。

しかしながら、このような古典的分析では、(i)と(iii)が共に「太郎」と「妻子」の親族関係を表し、同一の所有関係が成立しているという事実を捉えることができないという問題が残る。

(3) 本研究メンバーは、1998年以来、本研究の背景となる「名詞句の指示性・非指示性についての研究」および、それを基礎にした「コピュラ文や存在文に関する意味論的研究」を精力的に行ってきた。それらの研究を集大成した西山(2003)は、「コピュラ文と多様な構文との間には変項名詞句を介して意味構造上、密接なつながりがある」という仮説を提唱した。この仮説は、言語学界において多大な注目を浴び、活発な議論を呼んだ。本研究は、このような研究の延長線上にあるものとして位置づけることができる。

２．研究の目的

所有文は、日本語であれば、(iv)(v)のように、「A (に) は B がある/いる」という形式をもち、A が所有者、B が所有対象を表す構文である。これは、英語であれば、”A has B.”として実現する。

(iv) 太郎 (に) は欠点がある。

(v)　この会社には副社長がいない。

従来の言語研究では所有文に対する明確な定義が与えられていない。また、所有文が存在文となんらかの関わりをもつことは示唆されてきたものの、両者の関係が明示的に論じられることはなかった。本研究の目的は、研究代表者が１０数年前から押し進めてきたコピュラ文や存在文に関する新しい理論と、その理論を背後で支えている名詞句に関する意味論的研究（とりわけ指示的名詞句と変項名詞句の区別、名詞の飽和性に関する新しい分析）を武器にして所有文という構文を明確に定義し、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語などにおける所有文の意味論・語用論を詳細に検討することにある。とくに、所有文の意味を、A および B に登場する名詞句の意味と文中での意味機能の観点から分析し、この構文をコピュラ文や存在文との関係で有機的に記述・説明できる一般理論の構築を目指す。

３．研究の方法

(1) 所有文の分析の基礎となる構文、とくにさまざまなタイプのコピュラ文と存在文の特徴を考察し、その中に現れる名詞句の特性を、定性、指示性・非指示性の観点から明確にすることの意義を再確認する

(2) この一連の作業の後、所有文の分析に有効な名詞句の意味機能に関するこれまでの理論を整理し、その観点から日本語の所有文の意味構造を存在文の意味構造と比較しながら検討する。

(3) 英語、ドイツ語、フランス語などにおいて所有文と称せられているデータの収集と整備を行う。とくに、所有文と存在文との対応、変項名詞句の関与を手がかりに考察を行う。

(4) 所有文「A にはB がある」と絶対存在文「A の B が存在する」の違いを明確にするために、A と B との間の意味的緊張関係に注目して、広くデータを集めて検討する。

(5) 所有文「A (に) はB がある」における B の位置に現れる要素にどのタイプの数量詞が可能であるかという問題を、日本語と他言語の所有文とを比較しながら検討する。

(6) 所有文の使用に関して、近年の語用論モデルである関連性理論(Relevance Theory)による説明の可能性を探る。

これらの作業を効率的に行うため、所有文に関する資料を集積し、データベースを充実させる。そして、各国語のインフォーマントを活用する。また、研究者間同士の討論のための会合を定期的に開催する。

４．研究成果

(1) 所有文「A は B がある」の論理形式はそれと意味的に密接に関わる絶対存在文「A の B が存在する」の論理形式と共通する面もあるが、それと同時に異なる面もあることが判明した。

(2) 研究代表者西山は、所有文「「太郎 (に) は欠点がある。」は全体としては、太郎について［欠点があること］を叙述している措定コピュラ文とみなすことができ、措定コピュラ文の述語の位置に絶対存在文が埋め込まれた二重構造をもつ」とする仮説を提唱した。この仮説を設けることによって、(vi)と(vii)の間に見られる所有文と絶対存在文との関係、(viii)と(ix) の間に、見られる所有文と絶対存在文との関係が明確になった。

(vi)このコースは必読書がある。
(vii) このコースの必読書が存在する。
(viii) 花子は妹がいる。
(ix) 花子の妹がいる。

(3) 所有文「A (に) はBがある」におけるAとBとの関係が、[パラメータと非飽和名詞] という意味的緊張関係にないケースがある。(x)がその例であり、この種の所有文をいかに扱うかを検討した。

(x) 田中准教授には本がないから教授への昇進は難しいだろう。

(4) 所有文(x) における「田中准教授」と「本」の関係はコンテクスト次第で多様な解釈が可能である。この事実は、所有文「A (に) は B がある」における Aと Bの関係を狭義の「所有関係」に限定する必要がないことを示している。しかし、Aと Bの間にいかなる恣意的関係でも可能だというわけではなく、そこには語用論的に強い制約がある。本研究では、語用論の最新モデルである関連性理論を用いてこの制約の中身を解明した。

(5) 所有文「A (に) は B がある」に現れる名詞句 A および B の特性を、定性、指示性・非指示性、飽和性、非飽和性などの観点から明確にした。（西山・熊本・小屋）

(6) B が有生であるとき、所有文の動詞は(xi)のように「ある」「いる」両方が可能である場合と、(xii)のように「いる」だけが可能な場合がある。その違いはどこから来るかを検討した。また、(xi)のようにどちらも可能な場合、「ある」と「いる」でどのような意味の違いがあるかを検討した。(西山)

(xi) 花子には男兄弟が{ある／いる}。
(xii) 花子には兄貴が {*ある／いる}。

(7) 所有文とリスト文との関係を検討した。(xiii)には所有文の読みしかないが、(xiv)には所有文の読みとは別に［洋子の相談相手として夫がいる]のようなリスト文読みがあり、曖昧である。この違いがどこからくるかを検討した。(西山)

(xiii) 洋子には夫がある。
(xiv) 洋子には夫がいる。

(8) 所有文「AはBがある」のBにかかる数量詞にいかなる制約があるかを記述し、何故そのような制約があるかを説明することを通して、所有文の本質を明らかにした。(xv) (xvi)が示すように、B の名詞句は弱い数量詞とは共起するが、強い数量詞とは共起しないことが判明した。

(xv)このコース（に）は、三冊の/沢山の必読書がある。
(xvi) *このコース（に)は、大部分の/すべての必読書がある。

このような文法性の対比は、英語の所有文に関しても見ることができた。

(xvii)The house has two windows / many windows.
(xviii) *The house has all windows / most windows.

(9) 英語には、(xix)のように、have を用いたリスト文の用法があることが判明した。

(xix)A: Do they have to do everything by themselves?
B: They have their supporters. / There is the supporters.

そして、 there を用いたリスト文と have を用いたリスト文の間の意味の違いを検討した。（熊本・小屋）

(10) 日本語の所有文と絶対存在文の間には密接な関係があるが、英語の場合、次の二つの文はどのような関係にあるのかを検討した。(熊本)

(xx)a. There is no one to help me.
b. I have no one to help me.

(11) 所有文の分析にとって重要な「変項名詞句」という概念を再検討した。とくに、Donnellan(1966)のいう記述名詞句の属性的用法(attributive use) と変項名詞句とのあいだの本質的な違いは何かという問題を解明した。(熊本)

このように、所有文の意味を、A および B に登場する名詞句の意味と文中での意味機能の観点から分析し、この構文をコピュラ文や存在文との関係で有機的に記述・説明できる一般理論の構築に成功した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 西山佑司「非飽和名詞と譲渡不可能名詞について」 『明海大学大学院応用言語学研究』[査読有]第 14 号、2012、pp. 113-129.
②小屋逸樹「固有名とカキ料理構文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』[査読無]第 42 号、2011、pp. 265-287.
③熊本千明 “The Attributive Use and the Semantic Functions of *Whoever*-clauses.”『佐賀大学文化教育学部研究論文集』[査読有] 第 15 集第 2 号, 2011、pp. 175-187.

〔学会発表〕（計８件）
① 西山佑司「関連性理論を通して初めて見えてくる文の意味」第 1 回奈良女子大学文学部 欧米言語文化学 講演会（言語学 1)」於奈良女子大学（2013 年 3 月 17 日）
② 熊本千明「分裂文の主語代名詞の指示性」第 41 回慶應意味論・語用論研究会、於慶應義塾大学（2012 年 9 月 30 日）
③ Chiaki Kumamoto “Refefentiality of the Pronouns, it and that in Copular Sentences,” *Fifth Brno Conference on Linguistic Studies in English 2012.* Masaryk University（チェコ）(2012年9月17日）
④西山佑司「属性表現と語用論的解釈- - 語用論はどこまで意味論から自由であるか」日本語用論学会第8回談話会」於京都工芸繊維大学(2012年4月7日）
⑤熊本千明 「コピュラ文における it / that の指示性について」 第 33 回慶應意味論・語用論研究会、於慶應義塾大学（2012 年 2 月 12 日）
⑥西山佑司「「注文の多い料理店」の曖昧性について」 第 30 回慶應意味論・語用論研究会、於慶應義塾大学（2011 年 11 月 6 日）
⑦ 西山佑司「高校英語教科書に見られる絶対存在文」 第 27 回慶應意味論・語用論研究会、於慶應義塾大学（2011 年 7 月 31 日）
⑧ 西山佑司「名詞句の意味・機能・解釈について」2010 年度日本機能言語学会秋期大会、於新潟大学（2010 年 10 月 10 日）

〔図書〕（計３件）
① 今井邦彦、西山佑司『ことばの意味とはなんだろう--意味論と語用論の役割』岩波書店（2012 年 10 月）pp. 89-288.
② 池上嘉彦、窪薗晴夫、大津由紀雄、西山佑司『ことばワークショップ：言語を再発見する』 開拓社 （2011 年 6 月）pp. 135-180.
③澤田治美、西山佑司他 11（10 番目）『語・文と文法カテゴリーの意味』 ひつじ書房（2010 年 6 月）pp. 191-207.

６．研究組織
(1)研究代表者
西山　佑司（NISHIYAMA YUJI）
明海大学・外国語学部・教授
研究者番号：90051747

(2)研究分担者
熊本　千明（KUMAMOTO CHIAKI）
佐賀大学･文化教育学部･教授
研究者番号：10153355

(3)研究分担者
小屋　逸樹（KOYA ITSUKI）
慶應義塾大学・法学部・教授
研究者番号：80234904